

#007 お天気雑記帳

風の神

たわらやそうたつ

俵屋宗達の風神雷神図屏風に描かれている風神と雷神を並べると、愛嬌のある風神に対して、雷神はとても恐ろしい顔をしています。この雷神、どこかの奥様に似ている、風神は尻に敷かれた旦那様のようにも見えます。風袋を通勤のバックやリュックに変えると、どこことなく哀愁に満ちたサラリーマンのようです。この風袋を背負った風神のルーツが、中国だと思っている人が多いのではないのでしょうか。中国の風の神「風伯」は、左手に風火輪、右手に大きな団扇を持った鬼のような姿に描かれることが多く、風袋は持っていません。



▲ 風神雷神図屏風(俵屋宗達)より

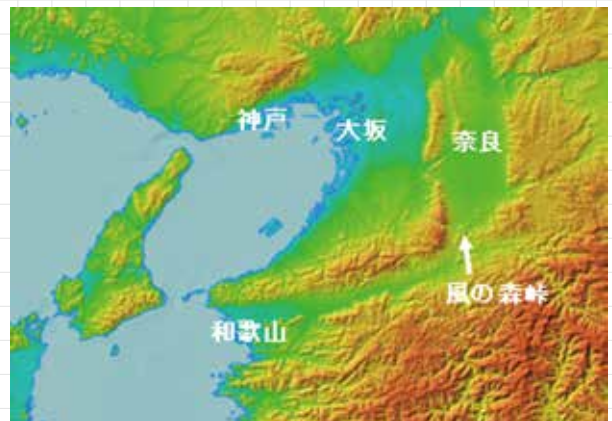
ギリシャ神話の北風の神ボレアスが、この風神のモデルになったという説があります。ギリシャ神話には、北・北東・東……の八方位それぞれに風の神がいます。北風の神ボレアスは、背中に大きな翼のある神です。アテネの王女のオレイチュイアに恋して言い寄ったものの、拒否されてしまい、怒って、強引に連れ去ってしまいます。誘拐・婦女暴行で逮捕されそうな神なのですが、夫婦仲は良かったらしく、2男2女の子供たちにも恵まれ、後にアテネの守護神にもなっています。このボレアスが、東西の文化交流で、中東を経由してインド、中国に伝わる途中で、風袋を持つ姿に変わっています。その姿が日本に伝わり、風神になったというのです。

俵屋宗達の風神雷神図、なんとなく、ボレアスとオレイチュイアのその後の姿のように見えてきました。

▲ ルーベンス
「ボレアスとオレイチュイア」

しなつひこのかみ

『古事記』に登場する風の神「志那都比古神」は、イザナギ・イザナミの国産み神話の中で、海・山・木・霧・野などの自然神とともに誕生した神です。どのような姿であったかは、わかりません。奈良県御所市の「風の森峠」の近くに風の森神社(高鴨神社)があり、この志那都比古神が農作物を風水害からまもる農業神として祀られています。この峠は奈良盆地と紀ノ川の境にあり、台風が九州・中国地方を縦断して日本海に進んだときなどに、紀ノ川沿いの上ってきた気流が、奈良盆地方向に流れ、南西の強い風が吹きます。



▲ 風の森峠(国土地理院色別標高図)

あめのまひとつのかみ

『日本書紀』に登場する鍛冶の神「天目一箇神」を風の神として祀っている神社もあります。この神は、一眼一足の不思議な姿をしています。

一眼の神が鍛冶の神・風の神になっている例が、世界各地の神話でも見受けられ、ギリシャ神話の鍛冶の神キュクロプスも一眼です。天目一箇神は、製鉄の技術とともに日本に伝わった神と思われる。

一足という姿は、竜巻がモデルになったと思われ、これも世界各地の神話に出てきます。たとえば、ハリケーンの語源となったカリブ海の嵐の神ウラカンも一本足です。ちなみに二本足の神様もいて、これは地震の神様だそうです。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭



洋泉社歴史新書
『気象で見直す日本史の合戦』
を出版しました。